

奄美島唄にみる女性の力 — ジェンダー論の視点から —

小 川 学 夫

はじめに

先ず、副題に挙げました「ジェンダー」とは何かということからお話しておきたいと思います。

私は、1990年に本学の一教員として採用していただいたのですが、そのころから「ジェンダー」という言葉が日本でもジワジワと広がりつつあったように思います。実を言いますと、私が女性だけの学生の短大で教えるようになって、先ず変わったのがこのジェンダー問題を意識することでした。

ところで、この「ジェンダー」とはどういう風に定義づけられるのかと言いますと、多くの国語辞典では、先ず「生物学上、雄雌を示すセックスという言葉」が説明され、この言葉の対義語としてジェンダーが出てきます。すなわち、ジェンダーとは「歴史的、文化的、社会的に形成される男女の差異」（『大辞林』など）のように書かれています。

これでもまだはっきりしないという方に例を挙げて言いますと、成人して子供を産む可能性を持つのがセックスとしての女性、持たないのが男性。セックスというのはこの生物学上の基準から見た性差のことであり、それに対して日本の男の子は総じてチャンバラが好きで、女の子はママゴトが好とだというのが、ジェンダーに属するということです。

考えてみると、私は本学に入る3,4年前は奄美にいて、島唄を中心とした文化研究をしていましたから、ジェンダーという言葉は全く知らなくても、性差というものはいつも頭にありました。今、ふと思い出したのですが、本学では「純心エッセイ」と副題の付いた「しるべ」という雑誌が発行されていました。私は平成6（1994）年の第9集に拙稿「南

島の女性」を投稿させていただいております。この「南島」というのは奄美、沖縄を指すのですが、ここではほとんど奄美のことでした。今回お話しすることの、かなりの部分が重複しています。

奄美は、ご承知のように鹿児島県に属しておりますが、文化的には本土鹿児島県の性差（ジェンダー）の状況とはかなり異なっているという思いは、そのころからも何となくありました。特に奄美の島唄やわらべ唄の歌詞の中に父母が出てくるとき、例外ないくらいに「あんま（母）とじゅう（父）」と、「母親」が先になっていることでした。年配の人の日常会話を聞いていてもこのことは違いませんでした。

後から詳しく聞いてみますと、女性優先は、両親だけでなく、夫妻のことも「とじ（妻）・うとう（夫）」、きょうだいのことも「うなり（姉妹）・えけり（兄弟）」と言葉の上では徹底的に女性優位であることが分かりました。いずれにせよこの問題は、すぐ後で論じたいと思います。

一方、同じ県内でありながら本土鹿児島を見ていますと、その実際はともかく、男尊女卑のお国柄だと多くの人が教えてくれました。私には鹿児島に若い男性の知り合いがいて、彼はよく東京や大阪に行って、鹿児島から来たと言うと、先ず薩摩の男尊女卑のことを言われるので、「この時は落ち込みますね」と、いつも言っていました。ところが、同じ薩摩の男性でも、薩摩では亭主がやたら強いというイメージがあるけれど、考えるとほんとうに強いのは女房の方で、亭主は女房の掌の上で操られているのかもしれない」と笑いながら教えてくれた男の人もあります。

ここは教員の役得で、私は講義の合間に学生に各家の事情を聞いてみますと、かなりワンマンな父親もいることはいるのですが、総体的には母親の方が断然強い感じがします。あくまで感じですが、近年、日本中が女性優位の方向に行っているのではないのでしょうか。

この点、唄というのは時代相というものを的確に残してくれるので、私などには研究がやめられないということになるのです。話が反学問的になりそうですので、これくらいにして話を進めます。

「母」が優先される唄

早速、最初に述べました、「アンマ（母）とジュー（父）」のように「母」

が優先された唄を挙げてみたいのですが、その大前提として奄美の島唄の不思議な現象をはっきりさせておきたいと思います。

奄美の島唄では、本土の多くの民謡のように、歌詞が1番から何番まできちっと決まっているというのは稀で、原則として歌い手（奄美では唄者と言っています）が曲と詩形が合致しさえすれば、気にいった歌詞を歌うというのが自然の形です。つまり、甲という歌詞があるとすれば、その歌詞は、Aという曲にも、Bという曲にも、CにもDという曲にも歌われることが頻繁に出てくるわけです。極端な話、「行きゅんにゃ加那節」という唄で大体元に歌われるのが

いきゅんにゃかな

わきゃくとうわすれて いきゅんにゃかな

うたちやうたちやが いきぐるしゃ

という歌詞です。「行ってしまうのですか、愛しいあなた。私のことなど忘れて、行ってしまうの、あなた。いや、今立とう立とうとしますが、つらいですよ」という意味なのですが、先ずこの歌詞からして「行きゅんにゃ加那節」以外の曲でもちゃんと歌える曲が2、3曲あるのです。

こんなことが何故まかり通るのかと言いますと、かつて島唄の多くは、掛け唄という形で歌われたからです。つまり、時には即興的な歌詞も出てくるといふ、複数の人たちによる唄問答が基本だったわけです。残念ながらこの歌掛けの習慣はほとんどなくなってしまい、今はその時々に応じて、歌い手がいろいろな歌詞を出すわけです。お祝いの時は、その祝いに相応しい歌詞を探してきてそれを歌います。もし反対に、結婚披露宴に、縁が切れるといった文句を歌うと、後で大変なことになります。

話が脱線しますが、古い昔のこと、ある長老が新築祝いに呼ばれて、古く奄美から鹿児島に旅する人を送る、送別の歌詞を歌いました。南風、つまりハイの風が吹いて、鹿児島の山川港まで無事についてください、という送別歌です。ところが、新築の家主は、その長老が帰ったあと、風で家を倒してしまうつもりか、「あの人は島唄の名人と言われているけど、もう呼ばないよ」と言ったと聞きました。長老に悪意はこれっぽ

ちもなかったわけで、私は同情したのですが、これだけ真剣に聞いている人もいます。

話を続けます。先ほど話をし始めた「アンマとジュウ」が連続して出てくる歌詞から挙げてみます。

あんまとじゅう
きのどくかんげんしょんな あんまとじゅう
こうめとうてまめとて みそらしゅんど

その意味は「母さん、父さん。気の毒に考えなさんなよ。母さん、父さん。私たちが、お米を確保して、豆を確保して、ちゃんと2人を養ってあげますからね」というものです。心優しい女の子の唄と考えて間違いないでしょうね。

さて、2つ目に挙げるものは、ちょっと違います。これは「くるだんど節」と言われる曲でよく歌われる歌詞です。「くるだんど」とは「空が黒づんで来たよ」という意味で、もともとは「雨乞い」を歌った唄ではないかと言われているのですが、先ほど申しましたように島唄は唄問答が基本でしたから、どんな歌詞が出てくるか分からないわけです。これが問題の歌詞です。

あんまがうかげ
きよらぎんきりゆしも
きよらきびしゅんしも
あんまがうかげ
じゅうがうかげ
そろばんらうんも
てならいするしも
じゅうがおかげ

お分かりでしょうか。「アンマとジュウ」が続いて出てくる形ではなく、別々に出てくるのですが、あんま（母）が先に出てくることは変わらないのです。

その意味は「お母さんのお陰だよ。きれいな着物が着られ、きれいな帯が巻けるのは、お母さんのお陰だ」が上の句部分で、「お父さんのお陰。ソロバンが習えるのも、手習いができるのも、お父さんのお陰」というのが下の句です。つまりこの唄は、母から始まる部分と、父からはじまる部分がしっかり分けられていて、しかもメロディが同じなのです。長い間、父親の部分から歌う人は恐らくいなかったのではないのでしょうか。しかしながら、私は逆転現象ともいうべき、いわゆる「ジュウ（父）」から始まる唄を2度聞いています。

1度目はもう40年以上も前の話で、歌ったのは小学生の女の子だったと記憶します。これを聞いたとき「昔はアンマ（お母さん）の方から始めたのは知っているよね」と言ったら、「お父さんが、日本では父母というように、父が最初なのだから、直さなければいけない」と言われたということです。私はショックでした。

実はその後も、日本中にブレイクした元ちとせさんのCDを私がかつて勤めていた奄美市名瀬のレコード楽器店が制作した時、私は頼まれて歌詞の聞き取りをしました。そしてその歌詞も逆転していたことに気づいたのです。さっそく元さんの家に電話したら、本人は不在でお母さんが出てこられ、「ちとせはAさんのビデオテープで覚えていましたよ」と教えてくれました。すぐに、理由が分かりました。やはりそのテープの歌い手も、日本本土の「父母」という言い方にこだわっていたのです。

私は、一研究者としてこうした改作も、全否定することは間違いだと考えました。民謡というのは、その時代、その環境の価値観に非常に敏感です。結局は一人ひとりの歌い手に主導権があるわけです。ただ、世界中で、男女平等思想が広まりつつあるというのに、ここでは逆を行ってしまったと、個人的には残念に思いました。

それはそれとして、私は奄美で女性がどうして優位に来ているかについて、考えることになったのも確かです。

ここで、折角ですから、わらべ唄の例も挙げておきます。私がよく参考にする『日本民謡大観（奄美沖縄）―奄美諸島篇』（日本放送協会編）には、子守歌も含めて90篇近いわらべ唄が収載されているのですが、「アンマ・ジュウ」と続けて出てくるもので、全ての例で母親が先になって

います。

1. ヨイヨ ヨイヨ
なくなヨ ほん なくなヨ ほん
2. なくな あんまが
うぐらじ こめとうていち
べえたし かましゅんど
かましゅんど なくなよ
3. なくなヨ じゅうが
ながやまじ ながどうりくわ
とうていち くりいりゅんど
なくなよ ほん なーくなよ

※以下略（『大観』109頁）

その意味は1が、「ヨイヨヨイヨ 泣くなよ、坊。泣くなよ、坊」。2が「泣くなよ、母さんが、お蔵に行って、米を取ってきて、米を炊いて、食べさせるよ。泣くなよ、坊」。3が「泣くなよ。父さんが長山に行き、長鳥を捕ってきて、上げるからね。泣くなよ、坊、泣くなよ」

この唄を敢えて挙げようと思ったのは、母親は米を炊くという、日常的なごく平凡なことをするのに、父親が長山に行って長鳥を捕ってきてくれるという、その対比がとても面白かったからです。

曲名となったヒロインたち

次に知っていただきたいのは、奄美の島唄では、人名が曲目になっているものが結構多いということです。いや、割合からすれば圧倒的といつてよいのかしれません。

思いつくままに挙げると「かんつめ節」「むちゃ加那節」「うらとみ節」「嘉徳なべ加那節」「うんにやだる節」「いそ加那節」「ちょうきくじょ節」「国直（くんにより）よね姉（あご）節」等があります。

それ対して、男性が曲名になっているのは、「やちゃ坊節」「儀志直節」「俊良主節」「こうき節」くらいのものです。

考えてみると、女性名が曲名になっているもののの中には、その相方が

男性であり、かなり重要な役割を担っているが、女性の方に名前を譲るというのがあります。一番分かりやすい例が、「いそ加那節」と言っ
てよいでしょう。

彼を歌った歌詞は次のようなものです。

うめにししゅう
だかちがいもゆる うめにししゅう
はなくれが
いそかなはかち はなくれが

その意味は「うめにし主。何処のいくのか、うめにし主よ。花を生けに。いそ加那の墓まで、花を生けに」というものです。「主」というのは上層の男性に付けられる敬称のようなものです。実際には「梅仁志主」などの立派な漢字が当てられたのですが、よく分かっていません。いずれにせよ、世間的にも良く知られた男性であったにもかかわらず曲名にはならなかったのです。男女二人が出てくる場合、女性名を曲名にしようという不文律があったのではないかと考えられます。

一方、男性名が曲名ながらも、妻がいて、しかも唄が上手でありながら曲名にならなかった女性がいたことも挙げておかなければなりません。「こうき節」がそうです。次のように歌われています。

こうきまさしゅや
さむせんかためてさりこ
うりがとじなりゅんちゅや
うたしゃぬじょうじ

「こうきまさ（幸喜政とも当て字されるが不詳）主は、三味線を肩に背負いあちこち歩く。その妻に当たる人は、唄者の上手だ」という意味です。奥さんの名前は今に伝わっていませんが、当時はどうだったのでしょうか。ただ考えられることはあります。口伝えでは、ある時期、唄三味線はあまり良い音楽だとは思われていなかったことがありました。特に女性が唄をするのを、ズレ、つまり遊女がやることだと嫌ったという話

があるのです。それがどの時代かしっかり特定できないのですが、そんな背景があったとも想像できます。

もう一曲、極めて個性的な女性でありながら、曲名とはならず、土地の名が曲名となったものがあります。「塩道長浜節」がそうで、この長浜は喜界島にあるものです。

しゅみちながはまなんて
わらべなきしゅすや
うりやたるがゆい
けさまつあせはだゆい

その意味は「塩道長浜に、童のような声で泣いている人がいる。それは誰のために泣いているのか。自分を浜で殺したけさまつという魅力的な女のためだ」というものです。このなかの「あせはだ（汗肌）」というのが問題で、ここではうっすらと肌に汗を浮かべる肉感的な女性を指しています。

なぜ、彼女が男の恨みの対象となったのでしょうか。それは、彼女が男を殺してしまったからです。

その伝説とはこうです。男は常日頃、けさまつに好意を持ち、逢うことをしつこく迫っていました。その結果、けさまつはついに塩道の浜で逢うことを承諾するのですが、二人が逢った時、けさまつが連れてきた馬が逃げるといけないと言って、その手綱を男の足首に結びます。その時、彼女は持っていた傘を馬の目の前で開き、驚いた馬は男を引きずったまま浜中を走るのです。男は当然亡くなって、亡霊となり夜な夜な泣いているというわけです。

このけさまつは、実は神ごとをする神女であって、聖なる彼女を犯そうとした男を成敗したのだ、という説もあります。「けさまつ節」といってもよいのですが、その曲名は全く聞きません。事件が事件なので名前を曲名にするのを遠慮したとも想像できます。

三味線と女性のこと

曲名の次は、女性と楽器との関係について考えてみます。奄美の唄と

関係のある楽器は主に三味線と太鼓（奄美ではチジンと言われているもの）であることは、大方の人に異議はないと思いますが、歴史的に古いのは三味線でしょうか、太鼓でしょうか。私はやはり太鼓が古いと見ます。

このことは、実は後の話と繋がるのですが、南島では太鼓は人々を神がかりさせる、いわゆる呪具のようなものだったからです。

皆さん、奄美大島、喜界島、徳之島では旧暦八月（徳之島では七月のところもあります）が昔は夏正月と意識されていて、島の皆が輪を作り、集落の広場や、家を一軒一軒回って踊る八月踊りというのをご存じだと思います。

この時の楽器が、チジン（鼓の訛り）といわれる直径4, 50センチの太鼓です。集落によっては2、3人から5、6人の人が踊りつつ、歌いつつ打つのですが、左手に太鼓を持ち右手の2本の撥で打っていくのです。その太鼓の打ち手はほとんどの集落では、男性ということになっていますが、奄美大島の北端に当たる佐仁集落だけは、何故か女性しか、太鼓は打てません。なぜでしょうか。昔は太鼓を打てたのは神ごとに従事する女性だけだったと私は考えています。つまり、そのリズムによって、相手を神がかり状態にさせることができたのだと私は信じています。佐仁では今もその習慣が形だけでも残っているのではないのでしょうか。

一方、三味線ですが、これは主に島唄と言われる唄につくものですが、つい20年ほど前までは奄美では男性だけの楽器でした。時々女性の弾き手はいましたが、特殊な例でした。理由は簡単です。三味線は中国から先ず沖縄に入ったものですが、沖縄で受け入れたのは琉球王国の侍でした。ですから、すぐには女性の楽器とはならなかったのだと思います。

問題は、太鼓と違って三味線は伴奏楽器であるために、歌う人のピッチに大きな影響を与えます。昔は弦の材料が限られていましたから、それほど高い音が出るものはありませんでしたが、近年になるとテグス（ビニールの釣り糸）も弦になった時期があります。特に民謡大会では男女一緒に舞台に出て歌うことがありましたから、どこまで高さを上げるかが大変でした。女性は総じて高い声を出えますし、男性はそうはいかないので、その駆け引きが大喧嘩になることも少なくはありませんで

した。

ところでそれが、この十年ほどで急激に争いがなくなりました。その理由は、島唄の師匠さんが女性にも三味線を教えだし、みんながマスターしてしまったのです。三味線さえ弾ければ、唄の高さを決めるのも自由です。

ここで、万々歳と言いたいところなのですが、そうとはなりません。結局、女性は精一杯高音の魅力を磨き、男性はそのままなので、男女が一緒に歌えなくなったのです。このことは何とかしてもらわなくてはと私ごとき古い島唄ファンはやきもきしている次第です。

うなり神と神女のこと

いよいよ、奄美における女性優位の核心に迫ります。

腕力の上では、奄美の女性といえども男性には勝てません。しかし、女性には男性を守護するという優しさがあり、これがある意味、強力なパワーとなりました。奄美には「うなり（姉妹）神信仰」という、兄弟たちを守護するという信仰が脈々と継承されてきたのです。

奄美大島、徳之島に「ヨイスラ節」という島唄があり、その打ち出しの歌詞としてよく知られているものです。

ふねのたかどもに
しりどうりのいちゆり
しるどうりやあらぬ
うなりかみがなし

その意味は、「舟の高い艫に白鳥が止まっています。いや、あれはただの白鳥ではありませんよ。うなり（姉妹）が神となって、兄弟たちの船旅を守っているのです」というものです。

さて、ここで「うなり神」という言葉は今ではほとんど、唄以外に聞くことはなくなりましたが、それが職業化したものが「ノロ」と言われる女性ではなかったかと考えます。ノロにもいろいろな階級があったとされますが、昔は首里王朝から免許をもらって、地域の諸行事をリードし、集落の安寧を祈った人たちだと想像できます。人々は、い

つもこの状況を見ていましたから、特に男性などは女性優位の感覚を自然に受け入れられたのではないでしょう。

「とらさんながね節」という唄に、次のような歌詞があります。

のろやのろだまし
ぐじやぐじだまし
たましうちはてて
どうやどうまで

これには物語があります。ある男が浜伝いに歩いて行ったら、シユク（あいごという稚魚）の大群を見つけました。本人は網やサデ（手で掬うような網）を持たなかったので、しまったと思う。その結果は、網を引き寄せて取ったもの、サデでとったもの、それぞれの取り分をもらい、そして歌詞のように「ノロはノロの取り分を手にし、グジ（ノロの下につく男性神職）はグジの取り分を取り、大群を見つけた本人の取り分は全くなかった」というもの。神女もその補佐役も十分優遇されていたのです。

ヤマト（日本本土）の場合は？

奄美では、日本本土のことをヤマトといいます。大和王朝があった名残かもしれませんがそれは分かりません。ここではそれを追求するのは止めて、日本全体の長い歴史における男性と女性の関係性について、素人なりに考えてみたいのです。

ここで皆さんに聞いてみたいことがあるのですが、日本は、あるいは欧米は男性、女性どちらが優位ということについて、考えたことがおありでしょうか？

正直に私の場合を話しますと、かつては「そりゃ。欧米にはレディーファーストという言葉があるくらいだから、女性優位に決まっているのではないですか」という考えでした。青年のころ、私はアメリカ映画をよく見ましたが、日本の女性とは問題にならないくらい、アメリカ女性はみんな元気潑刺に見えました。

この「かつて」がいつ頃であったか今は説明しかねるのですが、たぶ

んこの短大に勤め始めたころから、私も理論武装の必要に駆られて勉強するうちに、ついに反対の意見になっていました。

何かの本だったのですが、「西欧でレディーファーストが言われるのは、あれは女性の強さを賛美したものではなく、女性はもともと弱いためにそれを助けるために生まれた考えなのだ」と聞いたときには、「ええっ?」と思いながらも、よく考えてみると、そのようにも思えてきました。単純だと言われるのを覚悟で言いますが、日本の神様に天照大御神という神様がいますよね。古事記ではあの乱暴者の須佐能男命の姉さんとなっていますから、明らかに女性神ですよ。

もう一人います。卑弥呼は、神様か、神ごとをする、つまり沖縄のノロのような存在だと私は思っているのですが、女性の優位性と無関係ではないと思います。

こんな事例もあります。「世界中で会社からもらった給料をそっくり奥さん渡すのは、世界でも日本くらいだ」と聞いたときには、結構なショックとなりました。何処で間違えたのか、研究が必要だと思ったものです。といっても、私には鳥唄研究というライフワークがありますので、本格的な研究というわけにはいかないのですが、それでも優しい歴史の本を頼りに、我が国のジェンダー問題を見ていくことになりました。その成果を少し話してみたいと思います。

先ず日本が、男性優位の国と思わざるを得なかった理由が分かってきました。それはどうも、武士の世の中になった、いわゆる封建時代以降のことだということです。

武士は戦争がある意味、仕事の中心と言えそうです。腕力はどうしても男性が上になり、武士の妻の存在はもっぱら夫をサポートする役になります。それゆえ、それ以前の妻問いという、いわゆる夫婦一緒に住むのではなく夫が妻の家を毎夜訪問するという形はあり得なくなりました。

ここで「妻問い」がでましたから言いますが、奄美でも戦前、戦後すぐにはその習慣を有する地域があったようです。

Mさんという徳之島の人で、郷土研究ではすごい研究をした人ですが、結婚をしてしばらくは、夜になると奥さんの実家に通う期間があったようです。子供が何人かできたのちに夫婦独立して家を構えたようで

す。実際にどんな夫婦生活であったのかは聞くことのないまま M さんはなくなりましたが、奄美大島にこんな唄があります。

すばやどばあけて
かなまちゆるゆるや
ゆあらしやしげく
かなやみらん

「すばやど節」という唄なのですが、「すばやど」は玄関のような戸ではなく、側にある「横戸」のことで、妻問いのときこの横戸から入って行ったようです。

その意味は「横戸を開けて、加那（夫、または恋人）を待っていたけれど、夜嵐がひどく彼はやって来ない」というものです。「加那」はいわゆる「愛しい人」または「愛しい人」に付く愛称でもあるわけですが、ここでは名目上の夫であるというのが一般的ではなかったかと思います。状況によっては、恋人の段階か夫の段階か、はたまた男性が恋人を待っている場合もないわけでないのですが、奄美では妻問いがあったことは事実です。

もしかすると、鹿児島の人なら「よばい」を想像する人もいるかもしれませんが。「よばい」は「夜這い」を想像させて、どうも私などにはいいイメージが湧きません。しかし、古語辞典などでは「呼ぼう」、つまり相手の名を呼びあうからきたもので、それが結婚の意味になったのだと説明されています。「夜這って女性のもとに忍び込む」というのは後世の解釈のようです。奄美には残念ながら「よぼう」とか「よばい」という言葉は残っていないのですが、いってみれば「忍ぶ」がこれに当たるのではないのでしょうか。「妻問い」の話はこれくらいにします。

もう一つ、奄美の島唄では女性が曲名になったということと関連して、本土では文楽や歌舞伎で男女の登場人物が呼ばれる場合、ほとんどは女性が先です。かの封印切も「梅川・忠兵衛」が正式な呼び名ですし、ほか「お夏・清十郎」と女性優先です。「金色夜叉」の「貫一お宮」は？という人もいるかもしれませんが、あれは明治の物語で、本土はすでに男性優位の世界にはいていたという何よりの証拠です。奄美において

も明治の人で「基俊良」という人がいましたが、この人は明治の人で、奥さんが海に潮干狩りに行き亡くなるのです。みの加那という人のようでしたか、「みの加那節」とは聞いたことがありません。

最後の最後は、ある時、何かの本で見つけた、万葉集における「あんま（母）とじゅう（父）」版です。実際は「おもちち」と出てくるのですが、「おも」は母、「ちち」は今と変わりなく「父」のことです。中型の「古語辞典」にはこの項目がちゃんとあります、万葉版「アンマ・ジュウ」の話で講演を締めたいと存じます。念のために、四四〇二番にこの歌が載っていますので、確認してください。ありがとうございました。

*本稿は2019年6月27日、鹿児島純心女子短期大学において行った講演「島唄にみる奄美の女性像」をもとに、演題をはじめ、内容をかなりの部分、加除したものです。以上、お断りしておきます。

（鹿児島純心女子短期大学名誉教授）